

西洋思想叢書
奥行の生と世界
フッサールと現象論的哲学
林 克樹 著



発行所

晃洋書房
2,900円

奥行の生と世界

フッサール主観性理論の研究

林 克樹 (大学文学部助教授) 著

哲学研究には、二重の意味で「誠実さ」がある。一つは、取り組んでいる思想家への誠実さ。それは、思想家の核心となる問題を正面から論じること。もう一つは、自分自身への誠実さ。それは、論じる問題が研究者自身にとって切実なものかどうか。この両方を満たす研究は少ない。林克樹氏の『奥行の生と世界 フッサール主観性理論の研究』はそうした研究だ。ではフッサールと著者が共に格闘した問題とは何か。それが「生の奥行」に他ならない——知覚や反省など、何らかの仕方で対象化可能なものと、人間の

あらゆる活動の根底にあつて決して対象化できず、ただ「生きられる」だけのものとの差異。この「奥行」を徹底的に考え抜くこと——林氏によれば、フッサールの根本的洞察は、すべてこれを巡って展開する。現象学的反省によって人間の生の深奥を探索し続けたフッサールにとって、これは確かに根本問題の一つだ。その意味で本書は、正統派フッサール研究の書である。だが、必ずしもフッサールに忠実な解釈ではない。氏は各時期におけるフッサールの探求の意味や可能性を明示し、その思维を整理・追求する一方、限界や問題点を示しながら彼に挑戦する。フッサールが本当に洞察しようとしたこと、あるいは、洞察すべきだったのは、実はこれなのだ、と。それは著者の長年にわたる苦闘の証である。そこに二重の誠実さを見るのは、私だけではないだろう。

梶谷真司 (帝京大学専任講師)

中世の心象

それぞれの「受難」

二村宏江 (大学文学部教授) 著



南雲堂
15,000円

イエス・キリストの磔刑像は異教徒にとつてもお馴染みのものであるが、本書は、新約聖書の四つの福音書すべてで語られるイエス・キリストの受難が、英国中世の詩・劇、及び神秘主義文学の中で如何に描かれているかを論じたものである。学生に語りかけるような文体の、四七六頁に及ぶ書き下ろしの本文と、紀要などに発表された、イエスの生涯に関する論文を集めた補遺から成る。著者の永年にわたる地道な研究が結実した力作である。四つの福音書、経外典、『黄金伝説』、及び偽ボナヴ

ェントウラの『イエス・キリストの生涯についての黙想録』における受難像が概観され、それをもとに、中世英国の受難詩・劇、及び神秘家ジュリアンなどの作品に描かれた受難の詳細な分析がなされる。本書を開くと、口絵の受難のキリストの顔が先ず目に飛び込んでくる。十二世紀の木彫である。彩色は色あせているが、瘦せた苦難に満ちた表情は、人としてのイエスに対して憐れみ (compassion) を我々に抱かせる。著者とともに「受難」の変遷を辿ることにより「それぞれの『受難』を通して、中世の人々の心の中にあつたイエス・キリストの姿」を見ることが出来る。「あとがき」で、著者は「根気のいる孤独な作業であつた。…その間一人のひとの存在が私の背を押し続けていたように思う」と述べているが、「二人のひと」とはイエスであつたかもしれない。

秋篠憲一 (大学文学部助教授)

僕の古代史発掘

森 浩一 (大学名誉教授) 著

僕の古代史発掘

角川書店
1,700円

考古学の研究者は誰しも、自分の学問の立脚点となる遺跡を持つている。汗と泥にまみれながら自らの手で発掘した遺跡と知的な格闘を繰り返し続けた経験こそが、研究者のかけがえのない学問的財産になる。本書の著者である森浩一氏は、こうした遺跡との対話を実践し続けてきた。遺跡への愛情あふれる著者の筆致に包まれて、今まで無口だった遺跡たちが生き生きと語りはじめる。私たちはここに、ひとりの研究者がたどってきた、真摯な知的遍歴の軌跡を見ることができるのである。

著者の学問を貫くキーワード、それは「古代学」と「地域

学」である。考古学と文献史学を車の両輪とし、周辺のさまざまな学問を総合したところに生まれる「古代学」。都を中心とした歴史ではなく、日本列島のそれぞれの地域が持つ真の魅力を引き出そうとする「地域学」。本書では、このふたつがタテ糸とヨコ糸のように絡まりあい、ひとつの壮大な古代史の体系を作り出している。

本書には思わずニンマリしてしまうようなエピソードが散見する。体調を崩して入院した時、著者はその「記念」として「古代の医療についての覚書」を書きあげる。京都の錦市場で開かれていた岩手の物産展では海産物を買ひ込み、そこから奈良時代の陸奥国で交易をおこなっていた蝦夷の人々に思いを馳せる。あらゆることを研究の原動力にしてしまう著者の学問的な貪欲さに脱帽するのは、私だけではないだろう。

山田邦和 (花園大学教授)



講談社
514円

「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中心

アメリカの「超保守派」の世界観

森 孝一 (大学神学部教授) 著

著者は『宗教からよむ「アメリカ」』(一九九六年、講談社選書メチエ)以来、「見えない国教」をキーワードに、アメリカの宗教的側面の研究成果を世に問うてきたが、本書はその延長上に、対イラク戦争を強行したブッシュの世界観を分析したものである。

アメリカの政教分離とは「特定の宗教」に国家が肩入れすることであり、国民の大多数が信ずる「神」への信仰は「特定の宗教」にはあたらない。そして国民の八六％が宗教を自分の生

活にとって非常に大事と考えている以上、「神への信仰」が政治に反映されるのも驚くにはあたらない。

この特定の宗教に偏らない「神への信仰」を著者は「見えない国教」と呼ぶが、アメリカ国民の圧倒的多数派はキリスト教徒であり、神への信仰は容易にキリスト教と混同されがちである。そしてこのキリスト教徒のうちで、「自分たちの神のみが絶対であり、それ以外の者たちは真理から逸脱している」と考え善悪の単純な二元論を採る「原理主義的」な宗教右派は一八％を占めている。ブッシュ自身も回心体験を持ち、按手(牧師資格授与儀式)を受けた筋金入りの宗教右派の一人なのである。ブッシュが対テロ戦争を「十字軍」と呼んだことの意味も、アメリカの宗教文化のこうした背景を知ることにより初めて理解が可能になるのである。

中田 考 (大学神学部教授)

行政の新展開

福田耕治ほか編



法律文化社
2,800円

二十一世紀に入り、省庁の再編成、地方分権の推進、国家公務員制度の改革など、日本の行政は、新たな局面を迎えている。これまで、行政学者は、「動かない現実」を前提に、日本の行政を静態的に分析する傾向にあった。しかし、本書では、そのタイトル『行政の新展開』が示すとおり、今われわれが経験している変化のダイナミクスが分析されている。行政学の最先端で活躍する気鋭の研究者たちが分担執筆しており、変化の内容と方向性がテーマごとに読み解かれていく。

本書では、「環境変化と行政の対応」「行政活動の流れ」「行政構造の展望」という三部に分かれ、かなり広範なテーマが扱われている。ただし、現在出版されている行政学の教科書とは異なり、行政学が扱うべき内容を網羅することは意図されていない。行政の国際化、情報化、地方分権など、具体的なテーマに関して精緻な分析をしてみせることで「行政学の入門者に知的好奇心を誘う」という戦略がとられており、この試みは、概ね成功しているといえよう。

また、本全体の統一性を確保する方針はとられておらず、執筆者はかなり自由に自分の分析アプローチを駆使して議論を展開している。それだけに、各章をひとつの独立した質の高い論文として読むことができる。

執筆：市川喜崇（大学法学部助教授）

風間規男（近畿大学教授）

日本法社会史を拓く

井ヶ田良治（大学名誉教授）著



部局問題研究所
5,200円

本書は、日本近世・近代の入会・身分的差別・家をめぐる八つの章で構成され、これまでの「通説」や「学会の常識」を、明確な問題意識と細密な実証研究によって再検討した論文集である。第一部は、近世・近代の入会権や婚姻差別などをめぐる裁判判決にあらわれた部落問題を扱った四章から成り、第二部は、日本における土地所有権の絶対性の概念や家制度など「伝統」として語られるものが、近代になって創られたものであることを、裁判批判や学説批判を通じて明らかにした四章から成る。

本書の基底には、すでに定評のある著者の丁寧かつ緻密な史

料分析がある。例えば、多岐にわたる「通説」批判の一つ、「部落民が入会に關し、一般村民と同一の生活協同体を構成していなかった」とする学説を批判し、同一の入会団体構成員であったことを明らかにした第一章は、丹波国南桑田郡保津村の詳細な史料分析からもたらされたものである。

また、本書を貫く視点の一つは、「国家の制定法はその施行や適用に際して現実的変容をうける」という法社会史の視点であるが、その現実的変容が、法学者や地域の人々などさまざまな人々の運動や働きかけの作用によることを重視しているのも本書の特徴である。

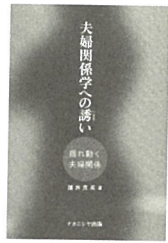
裁判の実際の中で部落問題を扱った研究が少ないだけに、研究史上の大きな意義があるが、それだけでなく、法社会史という学問の面白さと、著者の今日でも全く衰えない意欲と関心の広さを感じさせる一書でもある。

高久嶺之介（大学人文科学研究助教授）

夫婦関係学への誘い

揺れ動く夫婦関係

諸井克英 著



ナカニシヤ出版
2,000円

本書は、学術研究だけでなく、映画、音楽といったさまざまな資料を駆使し、現代の夫婦関係が置かれた状況とその特有の困難とを多面的に浮き彫りにしつつ、心理学の立場から、夫婦がよりよく共生していくための手がかりを提示しようとするものである。

ある関係についての私たちの「満足度」は、期待水準と現実とのギャップによって決まる。この点で、現代の夫婦は特有の困難を抱えている。女性の雇用労働力率の上昇、男女平等意識の高まりなどを背景に、人々、特に女性が抱く夫婦関係の現実

への期待が、より多方面にわたるようになったからである。社会のこのような変化に対応できないとき、夫婦関係に種々の困難やストレスが発生する。

筆者が提案するのは、「夫婦の絆」という一見伝統的な価値を、男女共同参画社会化の流れを受けて積極的に読み替えていくことである。しかし筆者は、特定の「理想の夫婦像」を掲げて声高に推奨するのではない。筆者はむしろ、夫婦間のコミュニケーションなど、日常的な現実を目を向ける。その中から、個々の夫婦がそれぞれ多様に、関係を再度見つめ直し、よりよい関係を築いていくための手がかりが模索されるのである。

多面的な現状分析とバランスのとれた価値提示とを兼ね備えた本書は、文体も読みやすく配慮されており、研究者から一般読者まで幅広い読者に読まれるべき書である。

金野美奈子（神戸大学助教授）

環境問題の「ほんとう」を考える

山下正和（工学部教授） 著



化学同人
1,500円

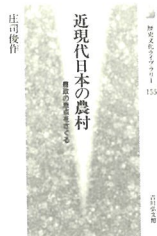
環境科学を専門にする著者が、環境問題について一般向けに分かりやすく解説した好著である。いま話題になっている大気、水、土壌などに係わる環境問題は十三項目ほどあり、その中の八項目が本書で取り上げられている。これらの問題に対する著者の一貫した主張は、自然の法則を守ることにある。すなわち、物質循環を大切にし、動物・植物・微生物の共生を図っていくことである。というのも、環境問題には不確定な要素があまりにも多く、科学的な見解が絶対正しいとはいえないため、最終的には自然の摂理に従うの

がベストの対策になるからだ。

さらに、著者によると、環境問題の本質は地球資源の枯渇でなく、物や熱をどのように排出処理するかにある。その考え方からすると、リサイクルはその過程で大量のエネルギーや物を必要とするため、地球にやさしい環境対策にはならない。たとえば、水に落とした一滴のインクを元に戻すことの難しさを想像すればよく分かる。したがって、リサイクルは物質循環とは言い難い。そこで環境保護の代替策として、著者はリユース（再利用）を奨励している。無駄をやめて節約に努めることによって、物や熱の排出量を抑制する方法である。

長引く不況の下で、最近再利用ビジネスが高い収益を上げているという。経済学の立場からすれば憂慮すべきデフレ経済も、環境科学の立場からすれば歓迎されるのかもしれない。

西村 理（大学経済学部教授）



吉川弘文館
1,700円

近現代日本の農村

農政の原点をさぐる

庄司俊作 大学人文科学研究所教授 著

本書は、日本近現代の農村の果たした役割を、農政における位置付けを中心にとったものである。町村合併が取りざたされている今日、「町村とむら」があらためてクロースアップされている。著者は農家の生産活動の場で、共同的なコミュニティである町村とむらこそが、農村の社会秩序を維持する単位であり、農政史上重要な役割を果たしてきた、と主張する。

戦前日本の農村は地主的土地所有が特徴であったが、第一次大戦後になると小作争議が発生する。この争議の解決策として、むらごとに地主・小作双方の代

表による合議機関がつくられた。これを著者は協調体制という。国家もこれを積極的に奨励した。この協調体制下の機関は、その後農地改革の実行機関としての農地委員会、さらに今日の農業委員会へと発展したとする。

農政に情熱をかけた官僚たちを重視したのも本書の特徴である。小作法案を検討した石黒忠篤や小平権一、農地改革を遂行した東畑四郎や和田博雄、大和田啓氣らである。とりわけ戦時期から戦後期は農民のためにという使命感に燃え、高適な理想と理念、自負をもった官僚を生み出した「日本農業の近現代史上稀有な時代」であったとする。本書は著者の長年にわたる研究の集大成であり、日本の農地改革がいかに町村とむらに内在する歴史的な必然であったかが説得力をもって描かれる。近代日本農村の歩みを知るうえで必読の文献と言えよう。

庄司春子（高等学校教諭）



筑摩書房
680円

ビジネス英語を学ぶ

亀田尚己 大学商学部教授 著

ビジネス英語関連の書物は「経験談」か「文例集」である場合が多い。しかし本書は「経験」と「理論」を融合させ、ビジネス英語の奥深さを紹介することに成功している。

著者は三十数カ国を訪問し、千回を超える英語ビジネス交渉の経験を有する。日本人として希有の英語力を身につけた著者が、日本人が習得すべき英語の姿とその方法論を具体的に、しかも本質的に、解説している。特に（一）日本人ビジネスパーソンの英語の特徴の分析、（二）英語習得のための十訓、は、他書

にはない意義深い切り口で書かれている。

しかし本書の最大の特徴は、ビジネス英語習得のためのヒントを数多く提示しながらも、行間で「人間中心のビジネス・コミュニケーション」を説いたところにある。

日本人が英語を使うのは、ビジネス状況であることが圧倒的に多い。このように重要なビジネス英語が主にTOEICのような検定試験の観点から論じられる現状は極めて不幸である。

ビジネスは人間が行う。そのために様々なすれ違いが生じるのだが、同時にそのために誤解を乗り越えようとするのだ。本書の「エピソード」で、著者がアメリカで行ったスピーチを誇りに思った在米日本人が登場することは、この点で象徴的であり、感動的であらう。

本書のこのメッセージが多くの人に届くことを祈りたい。

中邑光男（平安女学院大学助教授）



和泉書院
2,300円

アカツキの研究

平安人の時間

小林賢章 女子大学文学部教授 著

枕草子二九三段に、「丑四つと奏すなり。あけ侍るなりとひとりごつを」とある。従来の解釈ではよく「夜が明けてしまったようです」とされてきた。しかし、丑四つは午前二時半。なにかおかしい。また、源氏物語の「明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし」（須磨）という一節も、「明ける」を夜明けと考えると「夜深う」と矛盾する。

本書のタイトルの「暁」も含め、古典語の時間表現を表す言葉は、現代語の語感で解釈してしまうわけにはいかないのである。では、どういう解釈が正しいのだろうか。本書は、様々な

文献を縦横に駆使し、緻密な考察を重ねて、こうした問題をまことに鮮やかに解決する。

本書によれば、午前三時、丑の刻と寅の刻の間に日付変更時点があり、「暁」はその日付変更時点から日の出までを指す言葉だった。そして、先の例の「明く」は、その日付変更時間を過ぎるという意味だった。

すると枕草子の例は「もうすぐ日が変わりますね」と解釈できる。源氏物語の用例も、矛盾なく理解できる。ほかにも、いろいろな謎が関連して氷解していく。よく問題にされる「こよひ」などはもちろん、「よもすがら」「ありあけ」など、時間表現言葉が次々と鮮やかに分析されていく。

本書のような研究によって、文献の解釈はまた一歩前進していくのであろう。謎解きの面白さにひきこまれて読むうち、またまた「暁」になってしまった。

森山卓郎（京都教育大学助教授）



笠間書院
8,800円

紫式部の方法

源氏物語・紫式部集・紫式部日記

南波 浩編

本書は元々、南波浩元同志社

大学名誉教授の卒寿を記念して、門弟である原田敦子・廣田收・久保田孝夫諸先生方が企画されたものであったが、刊行を待たずして南波先生が逝去されたため、先生に対する追悼の意をこめ、新たに執筆者を拡げて企画し直されたという経過があると聞く。本書は現在、平安朝文学研究の第一線で活躍されている、総勢二十七人の研究者による論集であり、紫式部とその著作『源氏物語』『紫式部日記』『紫式部集』に関する、総合的研究の様相を呈している。また、各章の扉には、研究の現在にお

ける根本的な問題提起が提示されていて、研究史を鋭く問い直す問題意識が共有されていることに驚かされる。

ひとつひとつの論考を紹介できないのが残念であるが、本書を読むたびに、南波先生のお人柄と、先生のご研究が学会に与えた影響の広さと深さを思い見る気がする。

ちなみに、末尾に紫式部研究の文献目録が付されている。これは、南波先生の古稀記念論集『王朝物語とその周辺』（笠間書院、一九八二年）において、先生ご自身が作成された目録の以後の研究を網羅したものであり、誠に資料的価値が高い。本書はこれから平安朝文学の研究を志す後学にとって、必ずや揺るぎない指針となるに違いない。

執筆…廣田收（大学文学部教授）、
吉海直人（女子大学文学部教授）、
桑原一歌（大学大学院文学研究科）
宮崎あや（大学大学院文学研究科）



小林天眠・関西文壇の形成
天眠の文学と文学者の関係

和泉書院
2,500円

小林天眠と関西文壇の形成

真銅正宏 天文学部教授 ほか編

実のところ真銅氏の案内があつてそのパネル・ディスカッションに参加するまで小林天眠という名は知らなかった。出かけていったのは天眠の興した天佑社という出版社が平塚らいてうやエレン・ケイの著作を刊行しているという興味からであつた。いまから六年も前のことである。その会には多数の人が参加し、かつ熱気もあつて少々驚いた記憶がある。おもしろいディスカッションであつた。

本書は、そのパネルたちを中心となつて、自らも作品を発表しながらも文学者たちをおしみなく援助した実業家小林天眠という人の残した資料を元にして、人と業績、あるいは多数の文学者との交流・関係を、小林天眠をめぐる人物ネットワーク・小林天眠の文学・小林天眠の周辺という三部構成で明らかにしたものである。天眠の存在を突きつけることで、近代文学の「偶然性」や一極集中的に見られる文壇の相対化を示しうるのではないかという真銅氏らの心意気が根幹にあり、読んでいて楽しかった。また、文学者たちの「編み目」を覗くことができ、殊に天眠と与謝野寛・晶子夫妻との親交の有様は興味深いものであつた。一読をお勧めしたい。

執筆・熊谷昭宏・西村将洋

(以上大学大学院文学研究科)

露口卓也(天文学部教授)



洋泉社
2,200円

次の時代のための吉本隆明の読み方

村瀬 学 女子生活科学部教授 著

昨春秋、大学会館別館が取り壊された。壁には学生運動の名残として様々なビラや落書きがあり、その中に「大学の共同幻想を解体せよ」というゲバ字があつた。かつて学生たちに強い影響を与えた吉本隆明「共同幻想論」からの転用であろう。本書は、そんな時代に本学の学生であつた村瀬学氏が佐藤幹夫氏を聞き手に語つた吉本論である。ここでは、「見るものの位置」ということに着目した整理によつて、詩的な用語法ゆえに難解な吉本思想が解かれていく。たとえば、人々は不可避的

なある視野の限定(関係・立場)の中で倫理性を帯びるという「関係の絶対性」の説明であるとか、地図を描けるようなカタチで視線を上昇させ損なつてきた日本近代知識人の問題として「転向論」が読まれているところ、情報化社会における(高層ビルのように)高度化していく視線と生活者の視線の交錯の問題として『ハイ・イメージ論』が扱われているところなど、一貫している。その視線の不可避性や自在さについての意識の指摘を受け、改めて原典を読むと、多彩な用語の源泉となる、発展段階論的(視線の画一的で段階的な上昇・発想を相対化する吉本氏独特のポストモダン主义的資質を意識させられる。

近年、かつてのヒット曲のカヴァーが流行しているが、本書も、呪文のように呟かれた(ヨシモトリユメイ)の暗さを解いてみずみずしい。

吉岡威史(大学大学院文学研究科)

『浮雲遊不忘』(創立105周年 同志社幼稚園) が刊行されました

M.F.デントン先生によって1897(明治30)年出町幼稚園として始まった同志社幼稚園の105周年記念誌ができあがりました。題字は裏千家第15代家元宗室(現、玄室)氏(第33回卒園生)に105周年を記念してご寄贈していただいた軸からとっています。主な内容は、卒園生43人の思い出(内28人が昭和20年以前の方からの投稿)。元、現教員たちの思い出。保護者の方の寄稿。2002年の園児たちの紹介。幼稚園の略史、歴任教員名簿。第一期からの卒園生名簿(3,639人)。同志社幼稚園での楽しい幼児期の回想は同志社の教育観をうかがえると同時に、それぞれの時代の幼子が目の前に彷彿としてくると思います。

『浮雲遊不忘』

杉野 徹(同志社幼稚園長)編

同志社幼稚園 発行

A4版 228頁/税込み 1,000円

取扱い：同志社大学事業課(TEL075-251-3049)

同志社幼稚園(TEL075-251-4391、

FAX075-251-4099)



同志社大学法学部正規授業

「大使講座—今、世界を語る—」をインターネット配信

同志社大学は、読売新聞社との共催事業として、外交の第一線で活躍されているアメリカ・イギリス・ロシア・フランス・ドイツ・韓国・インドネシアの7カ国の駐日大使を秋学期に講師として招聘し、法学部の正規授業として「特殊講義(大使講座—今、世界を語る—)」を開講します。

各大使には、複雑な相互依存下の国際社会での外交および外交官の役割の変容とその意義、当該国と日本との現在の重要な外交課題等についてリレー形式で講義していただきます。

講義では、各国の事情に精通した読売新聞社のベテラン記者にコーディネーターをつとめていただき、日本語以外での講義については同時通訳または逐次通訳をつけます。

なお、本講座を本学以外の学生、一般市民の方々にも広く公開するため、講義終了2〜3週間後に、本学のホームページで当日の講義の模様をインターネット配信します。

●招聘大使

〈米国〉

ハワード・ベーカー氏

〈英国〉

スティーヴン・ゴマソール氏

〈フランス〉

ベルナルド・ド・モンフェラン氏

〈ドイツ〉

ヘンリク・シュミーゲロー氏

〈韓国〉

趙 世衡 氏

〈インドネシア〉

アブドゥル・イルサン氏

〈ロシア〉

* 現大使の離任に伴い、後任の大使が講義の予定。

科目担当者：村田晃嗣法学部助教授